HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「感情移入」と「自己移入」 : 現象学・解釈学における他者認識の理論（3）シェーラーの他者論（後）
Author(s)	石原, 孝二
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 106, 1-16
Issue Date	2002-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34017
Type	departmental bulletin paper
File Information	106_PL1-16.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 106 (2002)

「感情移入」と「自己移入」── 現象学・解釈学における他者認識の理論(3)

シェーラーの他者論（後）

石 原 孝 二

前稿[1]で示したように，シェーラーは「感情移入」を内的知覚と外的知覚の間の錯誤として捉えていた。シェーラーに従えば，感情移入とは，視覚や聴覚などの外的知覚を通して得た他者の体験を，自己の体験と取り違えることに他ならない。それゆえに，感情移入とは体験の帰属先に関する誤認でもあることになる。われわれは，他者によって発せられた言葉や伝承されたテキストを通じて得られた体験を，自分自身の体験であるかのように感じるのである。「恋をした若い娘は，自分の体験をイゾルデやジュリエットの中に感情移入するのではなく，むしろ，こうした小説の登場人物の感情を，彼女の狭い体験の内へ感情移入する。」(*Idole*, 266)

しかしシェーラーのこうした立場は逆に，自他の体験に関する錯誤が如何にして起こり得るのかという問いと，錯誤することなく自他の体験を知覚するとは一体どういうことなのかという問いを生じさせることになるだろう。

表現形式

この問いに対してシェーラーの議論を再構成しながら予め答えるとすれば，自他の体験に関する錯誤が起こり得るのは，われわれが「表現形式」を共有していることによってであり，一方，錯誤することなく自他の体験を知覚するとは，自己と他者の「統一的人格」に体験を帰属させることであるということになる。

まず最初の問いについて考えてみよう。自他の体験に関する錯誤が如何にして起こり得るのかという問いは，如何にして言葉や文字などの記号を通じて他者の体験が知覚され得るのかという問いに等しい。この問いに対してシェーラーの議論を再構成して答えるとすれば，次のように二段構えで答えることになる。第一に，われわれは原理的に，他者の体験を「直接」知覚することが可能である。第二に，原理的に可能な体験の知覚の中でわれわれが「実際に」知覚することができるのは，われわれが「表現」することのできるものだけである。

「〔ある個人の〕内的直観の作用は，自分の心的過程（Seelenvergänge）のみならず，その権能と可能性から言えば，さしあたりまだ分節されていない体験の流れとして，実在する心の領域全体を包括している。……われわれは，ますます不明瞭になっていきながらすべてを包括する意識を背景として，自分の自我を把握するのであり，この意識の内には，すべての他者の自我存在と体験もまた，原理的に「含まれている」ものとして与えられているのである。

……体験は，身体の状態への影響を介してのみ，際立つものとなる。その限りにおいて，自己-知覚と他者知覚との間には，いかなる原理的な区別もない。……かくして，自己知覚もまた，知覚されるべきものが表現傾向へともたらされることによってのみ可能なのである。」（*Sympathie*, 244ff.）

われわれは自己の体験のみならず他者の体験をも直接知覚することができるが，自己の体験にせよ，他者の体験にせよ，身体は何が知覚され，何が知覚されないかを「選択」する「分析器」の役割を果たす，というのがシェーラーの主張である。シェーラーのこうした捉え方に，ベルクソンの身体論やユクスキュルの環境世界論が影響を与えていることはもちろんだが，「表現」できるもののみが知覚できるというシェーラーの考え方は，身体の運動性と行動に重点を置くベルクソンの身体論やユクスキュルの環境世界論とのニュアンスの違いを感じさせる。この点に関しては，美学の文脈における，リッ

プスの「表現運動」の考え方や，あるいはフィードラーの，造形・描出活動を「視覚過程の発展」と捉える考え方[2]などの影響を考慮に入れるべきだろう。

シェーラーは『共感論』(*Sympathie*) でフィードラーに言及した後で次のように言っている。「詩人たちは，与えられた言語によってわれわれの体験がいわばそのなかに捕らえこまれている支配的図式の網を，新しい表現形式の創造を通して凌駕する。かくして詩人たちは，他の人々をも，みずからの体験のなかに，この新しいゆたかな表現形式のなかにふくまれているものをはじめて見せ，まさしく，このことを通して，他の人々の可能的自己知覚を拡大するのである。」(*Sympathie*, 247) 詩人たちは表現形式を創造することを通して，われわれが知覚しうる体験の範囲を拡げてくれる。このことは，逆に言えば，われわれは表現形式を共有することによって，他者の体験を自己のなかに取り入れることが可能になることを意味している。小説を通じて恋愛感情の表現方法を学ぶ少女は，そうした表現方法を身につけることによって，自分自身の中に新たな体験を見いだすことになる。表現形式の継承によって可能になったこの最初の知覚は，自分自身に由来する体験を知覚しているのではなく，他者に由来する体験を知覚しているのだ，というのがシェーラーの主張である。

子供は成長するに従って自分が属する共同体の表現形式を取り入れていくわけだが，この成長過程は，シェーラーに言わせれば，他者の体験が移植されていく過程にほかならない。

> 「「さしあたり」人間は，自己自身においてよりも，他者のうちに，自己の個体 (Individuum) におけるよりも，共同体のうちにより多く生きている。……子供が殆ど「母乳とともに」心的な体験の材料から吸い込むものは，「伝達」として体験された理念の転移の成果といったようなものではない。というのも，「伝達」にとっては，以下のことが本質的であるからである。すなわち，「伝達」においては，「伝達された内容」がまず「伝達するもの」の成果として理解され，また，同時にこのことによって，伝達され

た内容が他者に由来するものであることが共に体験されるのである。個人と個人の環境世界との間に生じるこの種の転移には，まさにこの契機が欠けている。下された判断や心の動きの表現などは，こうした転移においては，まず「理解」され，ある他我の表出（Äußerung）として体験されるのではなく，共に――遂行されるのであり，しかもこの「共遂行」における「共に」ということが現象的な所与に至ることなく，遂行されるのである。言い換えれば，それは，まず自己の判断「として」，自己の心の動き「として」，体験されるのである。」（*Sympathie*, 241）

個体化の原理

上に見たように，シェーラーは表現形式の共有によって自己と他者の間で体験の転移がおこり，体験の帰属先に関する錯誤が起こると考えていた。それでは，体験の帰属先を誤ることなく体験を知覚することはいかにして可能になるのだろうか。このことを見るためには，シェーラーの「環境世界」と「人格」の理解を確認しておく必要がある。というのも，シェーラーは，体験の「転移」の媒体としての環境世界から解放され，（利益共同体における個体性の意識を経て）「統一的人格」に至ることによってのみ，「個体化」が可能になると考えるからである。

シェーラーの「環境世界」と「人格」の概念，および「個体化」に関する考え方を整理するために，以下では連合心理学に対するシェーラーの態度を手がかりにすることにしよう。

シェーラーは『宇宙における人間の地位』で，ロックやヒュームなどの「連合心理学」を「〔パブロフの「条件反射」に対する〕心理学的なアナロジーに過ぎない」（*Kosmos*, 23）と批判する。シェーラーによれば，連合心理学は部分的な表象から全体的な表象が再現されるメカニズムを説明するものであり，そうしたメカニズムは，習慣づけられた反射に過ぎないのである。しかし一方でまた，シェーラーはこのメカニズムを情念伝達の原理として採用している。

「連合的記憶の原理は，すべての動物において何らかの程度で働いている。……人間においては，連合と再生の原理は，最も広範に行き渡っている。この原理はその最初の出現から，同種の仲間の情念表出（Affektausdruck）と記号に基づいた行為模倣及び運動模倣に結びついている。「模倣」や「模写」は反復衝動の特殊化である。……両方の現象〔連合・再生と模倣 ── 筆者〕が結びつくことによって初めて伝統という重要な事実が形成されるのであり，それは，動物の行動が同種の仲間の過去によって規定されるという全く新しい次元を生物学的「遺伝」に付け加えるのである。」（*Kosmos*, 25）

連合的記憶の原理によって形成される「伝統」と，この伝統を支える共同体が，人間にとっての「環境世界」をなすものである（Cf. *Formalismus*, 161, Anm.）。この環境世界の内で，世代から世代へと，情念や理念が転移し，この転移の過程が，自他未分化の状態における「体験流」を織りなすことになる（Cf. *Sympathie*, 241）。

シェーラの環境世界概念に多大な影響を与えた生物学者のユクスキュルは，環境世界を規定する「内世界」の側に，経験による一定の可塑性を認めていた[3]。シェーラーは，この可塑性を人間及び動物における伝統の形成による周囲環境の改変に拡張適用するのであり，またこの伝統の形成の説明において，ヒューム的な情念伝達の原理と，リップスの，〈表出・模倣本能による感情伝播〉という説明原理[4]を採用するのである。

勿論，シェーラーの意図は，こうした模倣衝動を通じた環境世界の共同形成の内に，他者理解の本来的な場や人間の本来的な姿を示すことにあるわけではない。人間が連合的記憶の能力に優れ，従って個人的習慣と伝統の形成において優れた能力を発揮し，また，環境世界内部での新たな事象に対応する能力としての「知能」（*Kosmos*, 28）において優れた能力を発揮するにしても，これらの能力は動物一般に認められるものであり，これらの能力に関する人間と他の動物の間の差違は程度の差に過ぎない。シェーラーに従うならば，人間の「特殊地位」は，環境世界の内部で可能になるこれらの能力にお

いてではなく，むしろ人間のふるまい方が「環境世界の呪縛からの解放」，すなわち「世界開放性」（Weltoffenheit）という形式をとることによる。動物が忘我的に環境世界の中に没入しているのに対し，人間は環境世界から距離をとり，それを「世界」として対象化することができるのであり，また自己の生理学的・心的諸性質や心的体験を対象化し，自己意識を有することができる。かくして，人間は，環境世界と自己の「有機的なもの」から自己を解放するのであり，その限りにおいてのみ「精神的存在者」（geistiges Wesen）であることができるのである。この精神的存在者としての人間は，生命体としての自己自身と世界とを対象化することによって，これらを「凌駕する」。しかし，人間は，精神としての自己自身，その中枢としての「人格」を対象化することはできない。この「人格」は，対象化する諸作用を「遂行」することによってのみ捉えられるものである（*Kosmos*, 39）。自己の人格が対象化され得ず，作用の遂行の内でのみ存在するものであるならば，他者の人格もまた，作用の遂行の内においてのみ把握され得るものであろう。それ故，シェーラーは，他の「人格」はその作用をわれわれが「共遂行」ないしは「追遂行」することによってのみ理解され得ると考える。我々の「作用」を他者に向け，他者を対象化することによってではなく，他者の「作用」がそこへと向けられているところのものを志向し，共にその「存在に参与する」（Seinsteilnahme, *Sympathie*, 219）ことによってのみ，我々は他者の人格を理解することができる，とシェーラーは考えるのである。（*Formalismus*, 470）

しかし，先に見たように，「共遂行」は環境世界の内での情念転移を支える作用とされていたものに他ならない。それ故に，シェーラーは，「単に共遂行する」（*Formalismus*, 472）だけでは，他者の人格を把握したことにならないと主張する。他者の作用を他者の作用として識別することなくその作用を〈共に〉，あるいは〈後から〉遂行する限りにおいて，そうした遂行は，他者の体験を自己の体験と混同する「感情移入」に他ならない（Cf. *Sympathie*, 232ff.）。従って，他者の人格を理解するためには，他者の作用を他者のものとして「共遂行」しなければならず，自他の個別的自我を対象的に認識する段階を経由する必要がある。シェーラーはこのことを，我々が形成する社会的統一態に

重層的な構造を認めることによって基礎づけようとする（*Formalismus*, 515)。シェーラーによれば，人格の統一態としての社会的統一態は，共体験と追体験とによって構成されるような「生命共同体」(Lebensgemeinschaft) と，自他の識別が行われ「個体性の意識」が形成される「利益社会」(Gesellschaft) とを包括する統一態に他ならない。他者の人格の理解は，同一の共同体への帰属を基盤としながら，利益社会において可能になる自他の体験の分化を経由して，他者の作用を自己のそれとは異なったものとして意識しながら共遂行し，その対象の存在に共に参与することによって可能になるのである。シェーラーにとって，情念や理念が自他未分化の体験流の内で転移していくことを可能にする環境世界・生命共同体は，利益社会及び人格の統一態の段階において乗り越えられるべきものではなく，むしろ利益社会を可能にするものであると同時に，利益社会と共に人格の統一態を支えるものなのである（*Formalismus*, 521, 527)。

シェーラーは，「自我および身体」は，こうした「統一的人格への体験可能な帰属性においてその究極的な個体化をみいだす」（*Sympathie*, 237）と主張する。自我と身体が統一的人格への帰属性においてその個体化をみいだすのだとすれば，自他の体験の分別もまた，この統一的人格への帰属によって可能になることになる。シェーラーは，個体的自我は「「体験」の単なる「連関」もしくは「総計」ではない」（*Sympathie*, 237）ことを強調し，ディルタイ的な個体性の捉え方[5]を暗に批判する。その上で，体験の錯誤なき知覚を，自己もしくは他者の全体的性格を象徴するものとして体験を知覚することのうちに見いだそうとするのである。

因果的関係と象徴関係

シェーラーは他者の体験の知覚は「因果的関係」(Kausalbeziehung) によって生じるものではなく，「象徴関係」(Symbolbeziehung) によって生じるものであると主張する。つまり，われわれは，例えば「羞恥」の結果としての「赤くなること」を知覚し，そこから原因としての「羞恥」を遡行的に推論し

ているわけではなく，「赤くなること」を表現野（Ausdrucksfeld）として捉えながら，「羞恥」という象徴的意味を直接見て取っているのである。「われわれは羞恥を赤くなることにおいて，喜びを笑いにおいて知覚する」のであり，また，「私は，〝彼が私を見つめていること〟をも見ている」（*Sympathie*, 21, 254）。ミルやディルタイらの類推論やリップスの模倣本能説が想定するように，われわれは他者の体験を他者の身振りや言葉を介して，間接的に知覚するのではなく，「直接」知覚するのだとシェーラーは主張するのである。

例えば，われわれは，「折り畳まれた手」という「視覚的現れ」（visuelle Erscheinung）を表現野として，そこに他者の「懇願」という「体験」との象徴関係を読みとっているのだとシェーラーは言う。われわれは，「視覚的現れ」と（実在的な心的過程としての）「体験」との間に，ある種の象徴的関係を読みとっているのだとするシェーラーの主張は，シェーラーが退けた類推説や模倣本能説と同じ難点を生じさせるものであろうし[6]，また，「象徴関係」でもってシェーラーが何を意味しているのかは必ずしも明瞭ではない[7]。

しかし，象徴関係を，「視覚的現れ」と「体験」との間の対応づけの関係としてではなく，体験の理解がつねに個体的自我の全体的性格の把握であることを示しているものだと受け止めるならば，シェーラーの議論はいくらか説得的なものとなろう。これに関してシェーラーは次のように言う。

「……あらゆる体験そのものは，ただ，わたしがこの体験において同時に自我個体（Ichindividuum）をとらえるという事実，あるいは，この体験がわたしにとってこのような自我個体の存立のための象徴となるという事実，これらの事実によってのみ，ある具体的な体験……なのである。この理由にもとづいてわたしは，他人に関し第一義的には，単にその個別的体験ではなく，つねにその総体的表現にあらわれた個体の心理的な全体的性格を把握する。……わたしは，たとえば顔色や「眼」の大きさを挙げることができるよりもずっと以前に，誰かが私に好意を持っているのか敵意を持っているのかを，「眼ざし」という単一の表現のなかにとらえるのである。」（*Sympathie*, 237f.）

ここでシェーラーは，他者の表情を介して他者の個性を全体的に把握することを，「象徴」の理解として捉えている。「象徴」に関するシェーラーのこ

うした見方は，カッシーラーの象徴形式論に大きな影響を与えたものだが[8]，さらに，『イデーン』第二巻でのフッサールの「自然因果性」と「動機づけ」に関する議論を理解する上でも興味深い。フッサール自身はシェーラーからそれほど影響を受けているとは思えないが[9]，『イデーン』第二巻の最初の編者であったシュタインはシェーラーから明確な影響を受けている。シュタインは，『感情移入論』で，シェーラーが「内的知覚」を自他無差別な知覚としている点を批判し，内的知覚はあくまでも，自己の体験に関わる「本源的な」(originär) 所与性であって，「非本源的な」所与性である「感情移入」とは区別されると主張する（*Einfühlung*, 38f.)。しかしその上で，シュタインは象徴と動機づけについて次のように述べている。

> 「象徴には〔語の意義を理解する場合のような〕表現された体験と表現する身体的変化との間の中間層のようなものは存在しない。(*Einfühlung*, 92)
>
> 因果関係がつねに「もし……ならば，その時は……」という形式を示し，ある出来事（心的なものであれ物理的なものであれ）の所与が，他の所与へと進むことを動機づけるのに対して，ここでは，対象領域を経由することなく，最も純粋な内在において，ある体験が他の体験から生じることが体験されるのである。……人はこれまで動機づけを心的なものの因果性として捉えようと努めてきた。……われわれは，動機づけの関係を，因果的関係とは異なる，理解的もしくは意味的な関係と呼ぶことにしたい。」(*Einfühlung*, 95)

フッサールが『論理学研究』第二巻で「象徴」を「記号」(Zeichen) と特に区別することなく使っていることを考えるならば (LUII/1, A71)，シュタインがここで「動機づけ」と「象徴」を関連づけているのは，シェーラー（および「記号」と「表現もしくは象徴」を区別するリップス，vgl. *Einfühlung*, 86）の影響によるものと思われる。いずれにせよ，象徴的理解を「動機づけ」の理解と関連づけようとするシュタインの試みは，フッサールの「動機づけ」

の概念を理解する上で，一つの示唆を与えるものであろう。

間柄とパトス的共同体

以上，前稿から引き続き，シェーラーの他者論を概観してきた。最後に，シェーラーの他者論の思想史的な意義について少し述べておくことにしよう。思想史的な観点から言えば，表情知覚に関するシェーラーの議論は，カッシーラーやシュタイン，メルロ＝ポンティなどの他者論に影響を与えているが，さらにまた，ハイデガーの「共存在」の概念も，シェーラーの『共感論』なしには成立し得なかったことも忘れるべきではない。

ハイデガーは1920/21年冬学期講義で次のように述べている。「「感情移入」-問題は，たいてい認識論的に問いが立てられ，それゆえに，初めから誤っている。シェーラーの把握は正しい方向に最も近いが，しかしそのシェーラーにしても，なお認識論的な問題設定に強く囚われている。」(GA60, 88)[10] この引用から，初期フライブルク時代のハイデガーの「共世界」の概念や，『存在と時間』における「共存在」の概念は，シェーラーの着想を土台としながら，その「認識論的」な問題設定を破壊していく過程で作り上げられていったものであることが窺える。

ハイデガーの他に，シェーラーの着想を土台としながら独自の他者論を展開していった思想家として，和辻とアンリにも触れておきたい[11]。

和辻は『倫理学』上巻（1937）で，シェーラーを評して次のように述べる。「彼は志向作用の共同を説く点において種々の洞察を示してはいるが，人と人との間柄が志向作用以上のものであることを洞察してはいない。」（36頁）和辻によれば，志向作用とは「行為から間柄的な契機を排除し，個人的意識の作用として抽象化したもの」に過ぎず，そうした立場からは，「自と他に別るる主体が自他不二において間柄を形成するという運動」である行為を理解することはできないのである。しかし，和辻のこうした批判的な言明にも関わらず，和辻の「間柄」の議論には，シェーラーからの強い影響が認められる。和辻は「連帯性」や「全体人格」（Gesamtpserson）といった用語をシェーラー

から借りているだけでなく，間柄の概念を導出するさいに，要所々でシェーラーの議論を（明示的にあるいは暗黙の内に）援用するのである。

和辻は「志向作用」と「間柄」の関係について次のように述べている。「……我が汝を意識することは汝が我を意識することとからみ合って来る。これを我々は意識の志向作用から区別して「間柄」と名づけた。」(36)しかし間柄の相互連関の例として和辻が挙げる「相見る，見つめる，にらみつける，ちらっと見る，おどおど見る，見ないふりして見る，見とれる，等々の「見方」(36頁）は，まさにシェーラーが「私は，〝彼が私を見つめていること〟をも見ている」という表現において，簡潔にしてかつ過不足無く言い表していたものであろう。シェーラーはこの凝縮された表現でもって，表情知覚において，自己と他者の関係性が直接織り込まれて知覚されていることを言い表していたのである。

とはいえ，シェーラーが作用のこうした相互連関を明示的に理解していたとは言い難いし，和辻が強調する「実践的行為的連関」という視点もシェーラーの視野には入っていない。その限りにおいて，和辻の「間柄」の議論は(少なくとも部分的には)，表情知覚に関するシェーラーの議論が，自他の関係性について含意している事柄を，明示化することによって展開されていったものとして捉えることができるだろう。

現代フランスの代表的な現象学者の一人であるアンリもまたシェーラーの(フッサール的な)「志向的現象学」の立場を批判する。アンリは『顕現の本質』において，シェーラーが「情感性」(affectivité) を復権させたことを評価しつつも，情感性を「志向性の相関項」として捉えたがために，シェーラーの分析においては，情感性は超越的なものとして外在性の内にとどまると批判した (EM, 715-735)。また『実質的現象学』では，心的なものを，志向性の相関項として想定するシェーラーの立場を批判しつつ，他者理解の本質を共-パトス (pathos-avec) の内に見ようとする。「共同体の本質が情感性であるかぎりにおいて，その本質は，単に人間たちに限られることなく，生の原初的〈受苦〉によって，かくしてまた受苦 (souffrance) の可能性によってそれ自体として定義されるすべてのものを含んでいる。われわれは受苦するす

べてのものと共に受苦することができるのであり，そこには，考えうるあらゆる共同体のもっとも広い形式である，〈共-パトス〉が存在するのである。」(PM, 179)[12]

アンリの「共-パトス」という考え方の根底には，現象学を「内在」によって基礎づけようとするアンリの一貫した立場がある。ギリシャ以来の西洋哲学の伝統は，〈見るもの〉と〈見られるもの〉との間に穿たれる「現象学的隔たり」が可視性の地平を形成し，「現れ」を可能にするという前提のもとにあった，というのがアンリの主張である。自己を超えて自己の外に向かう，こうした「超越」の動きを可能にするものこそが，アンリの言う「内在」に他ならない。「自己を超出せず，自己の外に身を投ぜず，自己を離れることも自己の外に出ることもなく自己自身にとどまる作用は，その本質において内在である。内在は，それによって超越そのものの開示が，そしてそのようなものとしての開示の根源的本質が遂行されるその根源的な仕方である。」(EM279-80)「情感性」とは，こうした内在の根源的な受容性において，「感覚の媒介によらずに自己を感じるもの」(577) を意味するのである[13]。

しかしこうした自己性の分析が，如何にして他者理解を基礎づけるものとなり得るのだろうか。この点についてアンリは次のように述べる。

「共同体の成員の各々は，世界のうちで他人と関わるのに先立って，どのようにして生において他人に関わるのだろうか。……生きる者は，他人を，他人が〈基底〉(Fond) についてなす固有の体験として，他人自身においてではなく，〈基底〉において体験するのである。この体験は，自我が自らのうちに〈基底〉をもつのと同様に，自分のうちに〈基底〉をもつ他人である。しかし，こうしたことを，自我も他人も表象することはない。それゆえにこそ，〈同じもの〉のうちに，自我と他人の両者とも深く沈められているのである。共同体は情感的な地下層であり，各々はそこで，各人自身がそれであるこの井戸から同じ水を飲む ── しかし，各人はそのことを知らないし，自分自身からも，他人からも，〈基底〉からも自らを区別しない。」(PM, 178)

アンリはまた，この〈基底〉にもとづいてのみ，自他が区別された関係，すなわち，「生きる者たちが，各々エゴとして，あるいは他我として，互いに見つめ合い，表象し合い，思惟し合う」ような関係も可能になるとする。その意味では，「世界」を媒介とするこうした関係は，ひとつの「関係の変様」であり，「上部構造」であるに過ぎないのである。ここでアンリはシェーラーの「生命共同体」の考え方に限りなく接近している。しかし同時にまた，アンリはここでシェーラーの共感論の主眼，すなわち，本来的な他者認識は，「他者を他者として」捉えることにあるという主張を拒絶するのである。

他者の「心的なもの」を，「志向性の相関項」として，「超越的実在」として捉えてしまうというアンリの批判は，他者の認識の問題を他者の体験の「知覚」の問題として説明していこうとするシェーラーの枠組みの根本的な欠陥を鋭く衝いている。他方でまた，「生の原初的受苦」に共同体を基礎づけようとするアンリの議論は，シェーラーの「生命共同体」の域を超え出ることもなく，さらにまた，和辻が提示した「間柄」の議論の圏域にも届かないように思われる。

註

[1]「「感情移入」と「自己移入」── 現象学・解釈学における他者認識の理論(2)シェーラーの他者論（前）」本誌通巻 98 号，1999 年 11 月

[2] Konrad Adolf Fiedler, *Der Ursprung der künstlichen Tätigkeit*, 1887（「芸術活動の根源」，『近代の芸術論』，中央公論社，1979 年所収。）シェーラーは『共感の本質と諸形式』でフィードラーのこの著作に言及している（*Sympathie*, 245, Anm. 1）。

[3] これについては，石原孝二「環境世界と他者理解」，坂井昭宏編『「環境」・「情報」・「生命」の相互連関をめぐる哲学的基礎研究』（平成 10～11 年度科学研究費補助金研究成果報告書），2000 年参照。以下の論述は，上記論文の一部を加筆修正したものである。

[4] 前々稿「「感情移入」と「自己移入」── 現象学と解釈学における他者認識の理論(1)」本誌通巻 98 号，1999 年 8 月，参照。

[5] ディルタイは個体性を「心的生の獲得された連関」の内に求める。Cf. Dilthey, *Gesammelte Schriften*, Bd. V, 1957, S. 225.

[6] 自己および他者の体験の知覚を「象徴関係」として説明する文脈で，シェーラーは内的知覚（内的直観）と外的知覚に関して次のように述べている。「……わたしは他人と同じように「わたし自身」をも「外的に知覚する」ことができる。わたしの身体を見るすべての眼ざし，わたし自身の身体に触れるすべての触覚も，つぎのことを教える，すなわち，もしもわたしが中指でわたしの親指に触れたならば，二重の感覚にもかかわらず，二つの異なった感覚器官の表面において同一の感覚内容が生まれると。かくして内的直観とは，一つの作用＝方向であり，これに帰属する諸作用をわれわれは，われわれ自身と他人との両方に対して遂行することができる。この遂行方向は，ちょうどこの方向がわたしの自我と体験一般を ── 単に直接的な「現在」をではなく ── 包括しているのとまったく同様に，その「能為」に応じて，はじめから他人の自我と体験をも包括している。」(*Sympathie*, 243)

ここでシェーラーは，〈自分自身を見る〉，あるいは〈自分自身に触れる〉という二重感覚を引き合いに出して体験知覚における自他の無差別を根拠づけようとしているのだが，この議論は，〈他者の視覚像と自己の視覚像は類似していない〉という事実により，成立し得ない。シェーラーは，この二重感覚を論拠に自己と他者の体験を包括する「普遍的な心的生の偉大な全体的流れ」を導き出すのだが，そうした包括的な「体験流」に関する議論も，従ってまた，論拠がないことになる。

[7] シェーラーは，『共感論』では，象徴関係による知覚を「根源的な」（originär）直観とする一方で，1913 年から 14 年の間に執筆された論文「現象学と認識論」("Phänomenologie und Erkenntnistheorie", in: *Gesammelte Werke*, Bd. 7, 1957）では，「世界の非象徴化」こそが現象学的・哲学的認識であると主張し，象徴による認識を，身体によって制約され媒介された認識として捉えている。

[8] Cf. Ernst Cassirer, *Die Philosophie der symbolischen Formen*, Bd. III. *Phänomenologie der Erkenntnis*, 1929, Erster Teil, "Ausdrucksfunktion und Ausdruckswelt".

[9] フッサールは発達心理学の知見を利用して議論を展開するシェーラーについて，ある遺稿で次のように評している。「およそ現象学的解釈たるものは，その材料（Vorlage）を根源的な自己所与の内に有していなければならない。この観点からすると，シェーラーの感情移入に関する理論は，本物の現象学的理論の反対物なのである。」*Husserliana*, Bd. XIV, hrsg. v. Iso Kern, 1973, S. 335.

[10] 初期フライブルク時代のハイデガーへのシェーラーの影響については，Cf. Mark Michalski, *Fremdwahrnehmung und Mitsein*, 1997 参照。

[11] 以下の論述は，実存思想協会・ドイツ観念論研究会合同シンポジウム（2001 年 9 月 30 日，於：早稲田大学）での発表原稿「錯誤の構造 ── シェーラーにおける〈自己〉と〈他者〉」の一部を加筆修正したものである。

[12] アンリのシェーラー批判の詳細については，吉永和加「アンリのシェーラー批判に見る他者把握の問題」，『メタフュシカ』（大阪大学文学部哲学講座），28，1997 年を参照。

[13] アンリの「情感性」に関する議論に関しては，山形頼洋『感情の自然』，法政大学出版局，1993 年，第四章「超越と内在」を参照した。

文献表

【Ernst Cassirer】
Die Philosophie der symbolischen Formen, Bd. III. *Phänomenologie der Erkenntnis*, 1929, Erster Teil, "Ausdrucksfunktion und Ausdruckswelt".
【Martin Heidegger】
GA29/30＝*Gesamtausgabe*, Bd. 29/30, 1983.（川原栄峰訳，『形而上学の根本諸問題』創文社）
GA60＝*Gesamtausgabe*, Bd. 60, 1995.
【Michel Henry】
EM＝*L'essence de la manifestation*, 1963.
PM＝*Phénoménologie matérielle*, 1990.（中敬夫・野村直正・吉永和加訳『実質的現象学』法政大学出版局）
【Edmund Husserl】
LUII/1＝*Logische Untersuchungen*, Zweiter Band. I. Teil, 1901/1913.
Husserliana, Bd. XIV, hrsg. v. Iso Kern, 1973.
【Mark Michalski】
Fremdwahrnehmung und Mitsein, 1997.
【Max Scheler】
Formalismus＝*Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik*, in: *Gewammelte Werke*, Bd. 2.（「倫理学における形式主義と実質価値倫理学」，『シェーラー著作集』1～3，白水社）
Sympathie＝*Wesen und Formen der Sympathie*, in: *Gesammelte Werke*, Bd. 7.（「同情の本質と諸形式」，『シェーラー著作集』8）
Idole＝"Die Idole der Selbsterkenntnis", in: *Gesammelte Werke*, Bd. 3.（「自己認識の偶像」，『シェーラー著作集』5）
Kosmos＝*Die Stellung des Menschen im Kosmos*, in: *Gesammelte Werke*, Bd. 9.（「宇宙における人間の地位」，『シェーラー著作集』15）
【Edith Stein】
Einfühlung＝*Zum Problem der Einfühlung*, 1917, Reprint der Originalausgabe, 1980.
【山形頼洋】
『感情の自然』，法政大学出版局，1997 年

【吉永和加】
「アンリのシェーラー批判に見る他者把握の問題」,『メタフェシカ』(大阪大学文学部哲学講座), 28, 1997 年
【和辻哲郎】
『倫理学』上,『和辻哲郎全集』第十巻, 岩波書店